

【 5 】

氏名	村上哲見
	むら かも てつ み
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第87号
学位授与の日付	昭和49年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	北宋詞研究

論文調査委員 (主査) 教授 小川環樹 教授 入矢義高 教授 佐伯 富

論 文 内 容 の 要 旨

「詞」は宋代に盛行した歌辞文芸で、中国文学における抒情的韻文様式の一つとしても重要な地位を占める。本論文はこの様式が、唐末五代の間に次第に独自の文芸性を備え、北宋において十分に成熟を遂げるに至る過程と、その間のさまざまな展開の様相を明らかにし、かつその発展の内的外的要因を考究するとともに、併せてこの様式の独自性およびその中国文学の中における位置づけを確かめることを主旨とする。

序説では、詞なる語が韻文様式の名称として定着してゆく過程を明らかにすることによって、文学様式に対する中国人の認識のしかたの変遷を論ずる。特に(序説第二章では)「詩」と「詞」の別が、ふつう言われる形態(句法)や現象面(歌唱されるか否か)の差異だけでは定めえず、何をいかに表現するかの文学の本質に関わる所に求むべきことを述べる。

上篇、唐五代詞論は、旧来の歌辞文芸すなわち「楽府」に代って新たな歌辞文芸が登場する経緯を述べ(第一章)、唐代前期では「近体詩」のみが歌唱され、中唐以後に長短句の「詞」を生じたとの通説を批判し、長短句の歌辞が早くから存したことを論証する。第二章では、晩唐の温庭筠(飛卿)が「詞」の新たな展開に決定的な役割りを果たしたことを論ずる。この歌辞形式に意欲的に取組んで独自の文学的境地を造り出し、韻文様式として成長する端緒は、彼がひらいたのである。第三章では「詞」が五代の分裂の期間に、地方政権の宮廷にひろまった状況を述べ、蜀における「花間集」の編刊の画期的な意義を論じ、この集の作家たちのうちでも特に韋莊の作の特色を明らかにする。また南唐では後主李煜と宰相馮延巳を論じ、彼らの詞風が北宋早期の官僚詞人たちに大きな影響を与えた点に注意する。

下篇、北宋詞論は、第一章総論において、北宋の「詞」の展開を初期、中期、後期の三段階に分けて考察したのち、中期の張先(子野 990~1078)と柳永(耆卿 987?~1053?)後期の蘇軾(東坡 1036~1101)と周邦彦(美成 1057~1121)を代表的作家として取り、第二章から第五章まで、おのおの一章をあてて詳しく論ずる。

中期（仁宗の朝）に至って「詞」は新たな展開を示し、「詩」とならんで一の韻文様式として認識の中に定着するのであり、後期（神宗朝以後）はその認識がいっそう普遍的となり、「詞」が様式として成熟する。

中期以後、二つの異った風潮がある。一は「詞」が官僚文人たちのあいだに浸透し、日常生活体験およびそれに密着した感情を詠ずるようになったことで、「詞」は格段に広い世界を獲得した。この風潮をひらいたのは張先であり、後期にそれを推しひろめたのは蘇軾および門人たちであった。

中期のもう一つの新しい現象は、それまでの「詞」の作品が短篇形式の「小令」に限られたのに、長篇の「慢詞」が作られるようになったことで、「詞」特有の表現スタイルは「慢詞」によって完全となる。この形式をおそらく民間歌謡から吸収し、綿々たる叙述の中にひたむきな情感を湛える新境を拓いたのは柳永である。後期においてそのあとを承け、表現に洗練を加え、特有の典雅幽遠な境地に達した作家は秦觀・賀铸らがあるが、最高の完成度を示したのは周邦彦であった。彼の「詞」の出現は北宋一代における「詞」の発展の総結であったと言い得る。

張先・蘇軾らの作は、この時代における「詞」の展開の重要な一側面であって、軽視すべきでないが、「詞」を「詩」に近づける方向がめだつ。これに対し、柳永・周邦彦らは、純粹抒情という「詞」本来の姿を固く守りつつ、新たな発展をみせるのであって、彼らこそ北宋詞の主軸と見なければならぬ。そして周邦彦は、精練を極め屈折をかさねた表現によって深遠な感情の世界を醸成し、「渾厚和雅」と呼ばれる至高の境地に達した。それは「詞」の独自性と宋代文人の洗練された趣味感覚とが融合した所に生じたこの様式の極点を示すものであった。

論文審査の結果の要旨

「詞」は中国文学史において特殊な地位を占める韻文の一つの様式(genre)であって、その歴史を叙した書はこれまでも有るけれども、おおむね作家の略伝をのせ作品の例を引き、前人の評語を羅列するに止まった。本論文はこのgenreの発展の過程における諸の問題をくわしく分析し解明したものである。

序説において、著者は「詞」が如何にして発生したかを考察し、「詞」は六朝時代すでに楽曲(楽府)の歌詞の義に用いられたことに注意して、唐代の俗楽(胡楽)が流行するに及んで、その歌詞が「曲子詞」とよばれ、「詞」はその略称だとする近年の文学史家の説に有力な裏づけを与えた(第一章)。

「詩」と「詞」の分界についても、その区別は単に句形の不同(五七言の定形と長短句・雜言との別)のみによるのではないとし、内容の違いに目を向けた。「詞」はもと男女の相思相愛の情を述べることを主とすることが、宋代では特に士大夫の倫理的感觉に合わないため、斥けて齒されなかった。是の如き私情よりは社会・国家の大事に対する慨世の志を吐露するのが「詩」であって、「詩」の理想たる「格調」の雄大さはそこに生ずる。即ち士君子の理念が文学様式の評価にかかわると、著者は説く。この見解は本論文の全部をつらぬく一つの柱である。

唐五代の「詞」を通論した上篇で、著者はまず「詞」の源流を考察し(第一章)、燕楽の歌辞の集録は早くから有ったが伝えを失したことに注目し、また「雲謡集」の成立年代につき、諸説を批判して晩唐の編纂と定めた考証は慎密で、動かせまいと思われる。次いで温庭筠が「詞」の作者として名と伝記の知ら

れる最初の詩人であるのみならず、この様式の芸術性を高め、教養ある人びとの欣赏到けるものたらしめる端緒を開いたと論じた。温の文学的資質と性格、ことに彼が当時の貴族社会の反逆児であったことが、その創造力のみなもとであったことを強調する(第二章)。これは著者の創見であって、「詞」の歴史の起点を以後の発展の明確な見とおしの上に立てたものである。

北宋の「詞」の代表作家四人をえらび、それぞれの特色を述べた下篇は、本論文の核心をなす。綜論において、五代より北宋初期までの諸作品に士大夫の文学的感覚がしだいに濃厚となる傾向が看取される(第一章)。北宋中期に至るや、張先が出て、官僚文人の日常生活の経験を「詞」に詠じ始める。何時、何処での誰のことを歌うかを明示した具象性を有する作品が多く見られる(第二章)。後期の蘇軾の作ではいっそう多く、「詞」はいちじるしく具象性を増すのである。内容もまた、相思の情を訴えるだけでなく、弟や友人との別離の悲哀、公務の余暇の閑適の楽しみ、さらに陶淵明ふうの田園生活の自由、歴史の故跡に立つての懐古など、広い範囲にわたり、ほとんど「詩」の題材と違わなくなる。「詞」は「詩」とならんで官僚文人の風流韻事の一部となったのであった(第四章)。

しかし「詞」は恋するものの情痴を綿々と叙するのが本領であり、北宋中期の傑出した作家柳永はこの「本色」に才能を発揮し、新しい楽曲の歌詞である長篇の「慢詞」の作の妙手となった。それは音楽の素養の深かった彼が都の遊里に流連し、妓女のために作詞したと伝えられる経歴を知れば、理解される。特殊な職業文人と見なすべきである点は、温庭筠に似る。その作品の特色が、やはり作者の資質と性格によって生じたことを著者は力説する(第三章)。

北宋後期の周邦彦は南北宋を通じ、「詞」の作家として最高の評価を与えられる人であるが、柳永の作風を継承し、また「慢詞」の名手であった。六朝唐代の詩家の用いた語で組み立てられた文体は典雅であり、柳永の如き鄙俗の感を起させない。しかし具象性を欠くことは、唐五代の諸家および柳永らと基本的には同様であって、その点で「詞」が生まれたころ以来の純粹抒情の「本色」を取りもどしたと言える(第五章)。

以上の論述は、いずれも傾聴すべきものを多く含んでおり、「詞」が鄙俗より優雅へと上昇の過程をたどり、宋代士大夫の芸術の感覚に適合し、受け入れられていったとする著者の見解は妥当である。しかし「詞」がもと無限定で具象性を有しない純粹抒情を「本色」としていたのが、張先や蘇軾に見られる如く、人物と情景の措定に伴なって具象性を獲得した結果、その世界を拡大し、(題材の広さをもってしても)ほぼ「詩」と同列の genre になったと言うのであれば、この二人より後に出た周邦彦の作品が、ふたたび純粹抒情へかえったにもかかわらず、「典雅」と評せられることには、著者が説いてなお未だ詳らかならざる者を感じさせる。問題は恐らく「詞」の評価が雅と俗の対立だけでは律しきれない処に在る。この点をさらに深くとらえて論ぜられるべきであったと考えられる。

全篇にわたり著者の創見は甚だ多く、また立論の基礎をなす事実の考証は精密の確であるが、例えば柳永の閱歴を述べて、彼の曾遊の地に湖北・湖南(楚)があるとした如きは疎忽であり、また作品の語句の解釈に二三の議すべき点がある。ただし、それらは大きな瑕ではなく、本論文全体のすぐれた価値をそこなうものではない。なお参考論文7篇はみな本論文の主張を助け相補うものである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。